

近世僧侶の農民子弟の学習活動へのかかわり

——安芸国広島藩領賀茂郡黒瀬組の事例——

梶井一暁

(キーワード：近世，日本，僧侶，農村，筆子塚，檀林，黒瀬組)

はじめに

本稿は、近世農民子弟における教育や学習に関する営みについて、とくに寺院や僧侶のかかわりの観点から、若干の考察を試みるものである。瀬戸内農村の一事例として安芸国賀茂郡黒瀬組をとりあげ、その地域でみられた動向を紹介しながら、検討を進めたい¹。もっとも、以下の考察で言及するのは、もとより農民子弟の教育や学習に関する営みのごく一端にすぎない。そのなかに観察される寺院や僧侶の関与や役割を断片的に拾いあげる作業を行うにとどまることを、はじめに断っておかなければならない。本稿は近世の寺院や僧侶に関する教育史的研究の試みの一環をなすものであり、その準備的考察に位置づく。

本稿のテーマにかかわって、先行研究による着目すべき指摘がある。すなわち、教育の社会史・文化史研究の成果は、(1)村の寺院に住する僧侶を単に宗教者や信仰者の側面においてのみ理解するのではなく、村の「知識人」であり、「教師」である僧侶の性格をとらえ、その視点から僧侶のもつ教育史的意味の検討が加えられる必要を指摘している。そして、(2)その僧侶の文化性と教師性は、かつて彼らが京都や江戸の本山学校（檀林や学林など）で学問修業をした経験をもつ者であり、学問や文化の中心地である都市とつながる文化的外部性を備えるところに由来することを述べている。(3)このような僧侶の養成教育に関する研究蓄積の必要にも言及しており、留意される²。ただし、ここまでの研究状況においては、僧侶に関する教育史的研究の必要を述べるにとどまっており、具体的な検討はほとんど手つかずの現状にある。本稿では、教育の社会史・文化史研究の成果が示す課題をふまえ、僧侶と農民子弟をめぐる教育や学習に関する営みを明らかにしようとする一作業として、以下の考察を行う。

第一に、事例とする黒瀬組においても手習師匠の墓碑である「筆子塚」の建立が確認されることを示す。僧侶の墓碑も含み、僧侶が手習師匠を勤めることの意味を考える。第二に、かつて僧侶であり、黒瀬組に來住し、近隣の子弟に手習いや学問を教える者の存在が認められる。外部の文化を農村にもちこむその人物のあり方を検討する。第三に、農民子弟のなかに僧侶となることをめざして江戸修学に向かう者があらわれる。村を出て外部に学ぼうとする彼らの動向を紹介するとともに、農民子弟の江戸修学に果たす国元寺院の役割を考察する。

1. 教授者と学習者の関係

(1) 2基の「筆子塚」

現在の東広島市西条町に所在する随泉寺（浄土宗鎮西派）の墓所内において、近世後期に主な生涯を送った人物の顕彰墓碑2基を認めることができる。いわゆる「筆子塚」や「師匠塚」と呼ばれるものである³。ここでは「筆子塚」と称しよう。

享保6（1721）年の『随泉寺由来』によれば、同寺は古くは禅寺であり、寛永期ころ、その廃絶跡に浄土宗寺院として再興されたと伝えられる。随泉寺は賀茂郡三津村（現在の東広島市安芸津町）の正念寺の末寺であり、随泉寺の末寺はない⁴。

この随泉寺の建つ地は、近世は広島藩領賀茂郡黒瀬組国近森近村のうちに含まれた。賀茂郡は郡域を7組に分け、黒瀬組18カ村はそのひとつをなした。黒瀬組に属する国近森近村は7郷からなり、それらは事実上の7カ村



図1 随泉寺

としてあった。森近郷はそのひとつであった。以下、森近村として扱うこの村に随泉寺はあった。森近村は米麦二毛作を主体とする純農村であり、商品作物の栽培はほとんどみられなかった。『森近村反別高代価約帳』によると、明治5（1872）年の地租改正時で同村の地積は約18町、戸数は62戸、人口は287人であった。

随泉寺において確認できる2基の「筆子塚」について、その1基は「荒谷仙助」の墓碑である。正面に「賢誉崇道居士」、左側面に「荒谷仙助墓」、右側面に「弘化三年四月十一日」とある。そして、裏面に「森近村」と24人の名前、台石に未確定の複数人の名前が刻まれている⁵。

仙助（？-1846）が生まれた森近村の荒谷家は、屋号を岡垣内といい、代々村役人を勤める家筋の上層農家であった。仙助は同家の当主であった。「文政二年卯四月差上ニ相成タル国郡誌御用書上帳」（写）の記述によれば⁶、「元禄御新格之頃」、当時の同家の当主であった「市郎右衛門儀蒙所務役ヲ苗字帯刀御免」となり、荒谷姓を名乗った。森近村では荒谷姓を有する同族集団が形成され、現在でも各家を屋号で呼んで区別する慣習がある。以下の本稿でも屋号を用いる。

岡垣内家は「当村ニテ家筋ナリ、先祖ヨリ数代蒙役儀ヲ相勤ム、仙助曾祖父市郎右衛門迄三代連続割庄屋儀ヲ相勤」めるものであった。しかし、仙助の祖父にあたる6代市郎右衛門のとき、すなわち「天明之頃先々庄屋市郎右衛門病死以来無役家ニ相成」るにいたった。跡目相続のこじれがもとであったと伝えられる。文政期、ようやく仙助のとき、村役人のひとつである社倉十人組頭取につき、「役家」としての復活を果たす⁷。村役人に復帰した仙助は、その役務を勤めるかたわら、近隣の子弟に手習いを教えた。手習師匠の身分は、農民、僧侶、医者、武士などが主に知られる⁸。仙助の例は、村役人を勤める上層農民が手習いを教えたものといえる。

一般に「筆子塚」は、手習いや学問を学んだ教え子らが師への酬恩の念から建立する墓碑と把握される。仙助の墓碑もそのようなもののひとつであり、師を敬慕する24人らの教え子とその学恩に報い、師の菩提を弔うために建立した顕彰墓碑であるとみてよい。仙助が行った手習い指導の実態は不明であるが⁹、このような「筆子塚」の存在は、他の例と同様、彼と教え子の関係が、単に識字技術の教授・学習における関係にとどまらず、人間形成や人格形成におよぶ関係であったことを伝える。

別の1基は「観誉」の墓碑である。観誉（1809？-1878）は随泉寺の8代住職の単流のことである。安政2（1855）年から同寺の住職を勤める浄土宗僧侶であった。墓碑の正面に「当山八世芳蓮社」、台石の正面に「観誉上人」、その右側面に「明治十一戊寅三月三日寂享年六十三」、そして左側面に「門弟中建之」とある。「門弟中」の個々の名前は挙げられていない。

随泉寺の『過去帳』は、その没年の明治11（1878）年の当該頁に「芳蓮社観誉上人察阿智道単流大和尚、当寺八世ナリ、六十三年」と書き留めている¹⁰。

随泉寺は、その「伝承」によれば、「子共衆ニいろは当ともおしへ遣」る寺院として古くからあったというから、同寺に住する歴代の僧侶の何人かは子弟に手習いを教えるものであったようである。単流もそのような住職のひとりであったのであろう。おそらく同寺の堂を利用して教授活動を行うことがあったのであろう¹¹。僧侶がしばしば近隣の子弟に手習いや学問を教えたことは、すでに多くの事例が紹介されている。いわば村の「教師」としての役割を果たす僧侶のひとりとして¹²、単流の存在もまた把握することができるであろう。単流の「筆子塚」は、仙助のものと同様、単流の指導を受けた「門弟」が師を敬慕して建立した墓碑と理解される。

単流の教育活動の詳細はやはり不明であるが、その教授内容は「いろは」以上におよぶものであったかもしれない。たとえば、岡垣内仙助の孫である得之助（1863-1922）の「履歴書」が残り¹³、それによると、彼は随泉寺に住する僧侶に学んでいる。文久元（1861）年から元治元（1864）年までのあいだ、「本村荒谷隆的ニ就キ普通学卒業ス」という。

まず、この「荒谷隆的」は当時の随泉寺住職であ



図2 仙助墓碑



図3 建立者の名前



図4 観誉墓碑

るが、単流の可能性はある。随泉寺の『過去帳』に記される単流の略歴に但し書きが付されており、「尤住職願書ニ者三津正念寺先々住隆演弟子隆の名前ニテ御免許御座候事」とある。たしかに、その「住職願書」では「隆的」の名前で文書が作成されている¹⁴。しかし、同文書に記される彼の出自と『過去帳』の伝えるそれが異なり、単流と隆的を同一人物と判断するには、いましばらく検討を要しよう。

つぎに、「普通学」の内容は不詳であるが、「いろは」以上の程度であると推測してもよいであろう。岡垣内家は村役人としてさまざまな村方書類を取り扱う必要のある家筋であったから、一般的状況から考えると、のちに同家の当主となる得之助も、比較的はやい段階から家庭内で読み書きなどの訓練を受け、父武太郎について初歩的な学習はすでにその準備教育段階ですませていたと思われる。このように考えると、得之助が隆的から学んだという「普通学」は、初歩以上の内容を含むものと思われる。単流と隆的が別人物であったとしても、いずれにしても農村の寺院に住まう僧侶が「いろは」程度にとどまらない教授内容を、近隣の子弟に提供していたかもしれない可能性は、村の教師であり、知識人である僧侶のあり方の一側面を考えるうえで興味深い¹⁵。

このように、単流の「筆子塚」を建立した「門弟」は、あるいは得之助を含む、「いろは」程度をこえた学的薫陶を受けた学習者たちであったとも考えられる¹⁶。

付言すれば、隆的（単流か）と得之助の関係は、仙助がそうであったように、当主が代々村役人の地位にあり、手習師匠を勤めることもあった岡垣内家のような上層農家において、子弟の初歩的な課程以上の学習は僧侶に任せていた様子をうかがわせ、留意される。それが得之助の例に限ったことなのか、歴代の当主にもみられた慣例的なことなのか、すぐに判断することは難しいが、上層農家子弟の学習活動に果たす僧侶の役割、さらにいえば、上層農家と僧侶の交流やつきあいの一端を示唆するものであるように思われる¹⁷。

(2) 「筆子塚」の意味するところ

手習所は近世の教育に関する営みのうち、いわば学校的施設のもっとも知られたものである。その手習所は近代学校とは相当程度異質な存在であることが、以上の「筆子塚」をめぐる教授者と学習者の関係に関する若干の考察からもやはり確認される。

近世では「教師」の用法は一般的でなく、「師」や「師匠」の用語が使われることのほうが多かったといわれる。近世は師がさきにおいて、そこに生徒が集まったのに対し、近代は学校がさきにあつて、生徒がいるから、教師が必要になったと指摘されるように¹⁸、近代教育システムの構築は、教授者と学習者の関係の基本的構図を変換させた。師のもとに集まった生徒が、尊敬にたる師を慕い、その学恩に謝して建立するのが、「筆子塚」であった。敬慕の念によって切り結ばれる師と教え子の関係の生成の結果が「筆子塚」といえる。その関係は、いわゆる師弟関係と呼んでも差し支えない性格のものであると思われる。

森近村で観察される様相をふまえてもう少し述べれば、手習いや学問を契機として、師と教え子のなかに精神的・生涯的につながる人間関係がつけられる結果が、教え子による師の顕彰墓碑の建立という行為なのであろう。手習いをおえた子弟は一般に家業に従事し、生村に留まったから¹⁹、生活圏をともにする師とのつきあいは、手習い後もつづく。両者はともに村落共同体の構成員である。師は教え子の成長過程を日々の生活のなかのさまざまな機会を通じて見守ることとなるし、教え子は師の生涯を見届けることともなる。そして、師の薫陶を受けた教え子はやがて大人となり、それぞれ村落共同体のなかで一定の役割を担う構成員となる。

たとえば、森近村ではつぎのような騒動があった。「玉垣一件」といわれるものである²⁰。僧侶が関係するものではないが、言及しておく。仙助の岡垣内家を含む荒谷氏一族は、随泉寺を菩提寺とする同族集団を形成し、それを荒谷浄土講中と呼んだ。安政期、随泉寺の開基檀家である土居荒谷家の主導によって同寺の墓所改装が行われることとなった。土居家は、随泉寺の浄土宗寺院としての再建に尽力し、同寺再興の祖とされる源左衛門（浄閑）を3代当主にもつ家であった。土居家はまた草分百姓として森近村を開いた村きっての旧家であり、代々森近村の長百姓を勤める富農であった。改装の内容は墓所の移動と玉垣の造築である。この改装工事の過程で、農家における家格意識の高揚を背景に、各家の玉垣の位置関係、すなわち講中での序列関係をめぐる争論が起きた。仙助の子・岡垣内武太郎と土居礼助のあいだ、土居家の分家のあいだでそれぞれ対立があった。興味深いのは、「玉垣一件」の過程において、一件の経過の詳述は省くが、礼助は武太郎に対し、「私シ義御当家尊父之弟子ニ御座候故此段御内々申遣候、此度土居御先祖五輪墓所へ玉垣ヲ相調分レ之家名相附貫申候而出来申候処、同事浄土分レ之事ニ御座候而当家之家名無之候而者末之世之為ニあしくハ御座有間敷義与奉存候」と述べている。かつて仙助のもとで学び、いまは土居家の当主となった礼助が「弟子」としての態度を示している。村を代表する家格を誇る岡垣内家と土居家が対立するという、講中を揺るがす騒動のなかで、かつて師の学恩に浴した者としての紐帯が呼び起こされるわけである。いまや大人となり、

それぞれが家の当主となり、責任と主張をもつ立場にあるようになった武太郎と礼助は、ともに仙助のもとで学んだ経験を共有する者である。対立の危機に際して、その経験があらためて想起され、彼らのなかで師への敬慕の念が再認識されることとなる。師を尊ぶ意識をなかだちとして、大人となった教え子がまとまりをとりもどそうとする契機が生じる局面は、近世の教授・学習過程を通じて切り結ばれる師と教え子の関係の一断面を示し、興味深い²¹。

2. 移動する教授者と僧侶経験

黒瀬組18ヵ村のひとつである菅田村に「中島梅菴」の開く「寺子屋」があった。「養成館」と称したようであり、天保13(1842)年開業、明治初年廃業と伝えられる。梅菴の身分は「浪人」であり、教授内容は「読書詩習字」、生徒は男100人、女15人であったという²²。

菅田村は文政12(1829)年時点で村高169石余り、戸数68戸、人口321人の純農村であった²³。同村は現在の黒瀬町に位置し、町内に梅菴の事績を伝える墓碑「梅菴先生之墓」が残る。碑文は以下のように記されている²⁴。梅菴の門人が建立したものである。門人の個別名は判明しない。

先生之祖世豊前中津藩士、姓石坂氏考諱新八郎、母諱某中島氏、新八郎退隠播州明石遂贅中嶋長左衛門、家有二男一女、女仲適某、嫡新蔵乃先生也、二男栄治襲中嶋氏、先生以享和元年辛酉夏生、幼薙髮參禪住当州完戸高乾院、素山道立和尚是也、年及三十七歳還俗称中島禎二号梅菴、文政十二年己丑夏来寓芸州梟郡南方、徒居菅田村亡幾亦除髮法諱善友、娶古家生二男一女、長源太郎二十五歳、次僧徹照二十歳、女知勢十五歳、先生巧鉄筆授徒三十余年、明治二己巳夏病没矣四月廿九日也、先生臨終賦詩曰、六十九年一樹梅、瘦姿枯朽入悲哉、人間榮辱唯如夢、露命隨風歸去来、門人相謀建石請銘干余々銘之曰、祖出中津、考妣在播、弗空二新、古家維伝、留顕菅田、祀有子孫、源絢夫大空溪撰、門人梅雪源素行書之也



図5 梅菴墓碑

享和元(1801)年、中津藩士であった父石坂新八郎と母中島長左衛門娘のあいだに長男として生まれた中島梅菴(幼名・新蔵)は、やがて播州の高乾院に入り、禅僧として暮らす。高乾院の詳細は不明である。やがて還俗して梅菴と名乗り、文政12(1829)年、賀茂郡南方村に来住する。南方村も黒瀬組18ヵ村のうちのひとつである。のちに菅田村に移り、30年余りにわたって近隣の子弟に教授するところがあったという。また、二男一女をもうけ、再び僧侶として暮らしたようである。浄土真宗僧侶ということであろう。生計の実態は不詳である。没年は明治2(1869)年、享年69歳であった²⁵。

梅菴について伝える他の資料は、現在のところ、他にみあたらず、「先生巧鉄筆授徒三十余年」という内容は不詳である。「読書詩習字」という教授内容は、初歩的な課程以上におよぶものであったと理解されるし、碑文に刻まれる詩や撰文者を考慮すると、梅菴の開く私塾は手習所というよりも学問所といったほうがよい類のものであろうか²⁶。

彼の黒瀬地域への来訪の経緯も定かでない。不明の部分が多い梅菴であるが、興味深いのは、彼の生涯が移動をともなうものであったことである。そして、僧侶としての経験を有することである。たとえば、さきに紹介した仙助が生涯的に定まった居村をもち、そこで教授活動を行ったあり方とは異なる。

長男として生まれた梅菴が父の跡を継がず、高乾院に参禅し、僧侶としての進路をとることは興味深いところであるが、彼が出家にいたる経緯は不明である。高乾院時代の彼の修業活動の内容も定かでないが、おそらく同院で修業をつづけるなかで仏典や漢籍に接する機会に恵まれるとともに、寺院にはさまざまな来遊者がいるのが珍しくないから、関係する僧侶や文化人や知識人と交わることもしばしばであったと想像される。還俗した彼は、そのような学問的・文化的体験を、農村にもちこむ存在であったといえる。

播州から黒瀬地域に来住する梅菴の動機や経緯、すなわち黒瀬地域に縁者があったのか、そうでなくて偶然であったのか、このあたりの事情も未詳である。推測すれば、具体的にこの地に頼るものがあつたようにはみえない。黒瀬地域は「安芸門徒」の呼称でよく知られる真宗優勢地帯のうちにあり、禅宗寺院はない。南方村の慶雲寺はもとは禅宗寺院であったが、寛永年間には真宗に改宗している。もしも梅菴が黒瀬地域を明確な目的地と定めて播州を出発したのでなく、たとえば、いずれかの寺院や私塾での勉強をめざして西へ移動する過程のなかでこの地を訪れたぐあいに²⁷、彼の黒瀬地域への来住に必然性がないのならば、彼はここに辿り着くまえ、いずれかの別の地に留まることが

あったかもしれない。そして、その地で近隣の子弟に何か教えるようなことがあったかもしれない。結果的に彼は黒瀬地域に踏み入り、南方村を訪れ、菅田村に移って一家を得て、同村を居村と定め、ここで30年余りの教授活動を行うこととなる。しかし、事情が違えば、あるいは菅田村での滞在は経過的なものにおわり、彼は再び他の地へ移っていく存在であった可能性もなくはない。そして、留まった他の地で再び教授活動にあたるものであったかもしれない。一家をもち、『過去帳』に死亡記録が載る村落構成員たる梅菴であるが、僧侶や農民と把握されることなく、「浪人」と目されるのは、そのような移動とともにある生涯のなかにあったからであろうか。移動をとまなう生涯と親和的であった梅菴は、それゆえ、黒瀬地域で人々と交流を結ぶこととなった。

また、梅菴の例が特異な例でないならば、現在には明確な足跡は伝わらないものの、黒瀬地域を来訪し、その留まった期間や教授した内容はさまざまであろうが、何らかの活動を行い、黒瀬地域の人々と交流をもった他の者があったかもしれない可能性も、まったく否定はできないであろう²⁸。

遊歴傾向が人々の教育研究の基本的立場にあった中世に比し²⁹、身分制や寺請制が強固にかたちづくられるようになる近世、その傾向は停滞に向かう。しかし、梅菴の例、あるいはさきにみた江戸修学経験をもつ単流の例にもうかがえるように、人が動くところに知が伝達され、蓄積されるありさまが、やはりまた近世のなかに看取されるであろう。その知の担い手として、梅菴であれ、単流であれ、僧侶の存在が少なからず意味をもつことを、黒瀬地域の事例は示唆する。

3. 村を出て外部に学ぶ農民子弟

(1) 私塾に学ぶ農民子弟

黒瀬地域の人々のなかに、手習所の課程や来住者が提供する知識には満足せず、近隣に開かれる私塾（学問所）に入門する者があらわれる。たとえば、賀茂郡家村に野坂完山（1785—1840）の開く塾があった。完山は広島や京都に学んだ医学者であり、塾では医学と儒学を中心に教えた。入門者は300～400人が認められ、他国から入門する者もあった³⁰。この完山の塾に入門する黒瀬組18ヵ村出身者は20人を数えた³¹。

さらに進んで学問を修めようとする者は、事情が許せば、他国に修学先を求めることもある。黒瀬地域の人々の場合はどうか。たとえば、菅茶山（1748—1827）が備後国神辺に開く廉塾はよく知られた漢学・漢詩文塾であるが、いまのところ、この塾に学んだ黒瀬地域出身者は確認されない³²。また、広瀬淡窓（1782—1856）が豊後国日田に開く近世最大規模の私塾といわれる咸宜園の門人に名を連ねる黒瀬地域出身者も、認められない³³。むろん、全国に数多ある私塾に学ぶ黒瀬地域出身者の動向をすべて把握することは不可能である。他の私塾に学ぶ者があったかもしれない。

(2) 江戸の寺院に学ぶ農民子弟

① 土居家の詮廓の事例

黒瀬地域でみられた動向で着目すべきは、僧侶として寺院ルートで江戸に学ぶ進路である。さきに検討した森近村に関心を戻そう。

浄土真宗の優勢地帯である黒瀬地域にあって、森近村の随泉寺は浄土宗寺院であった。郡内の寺院数でいえば、8割近くが浄土真宗であり、浄土宗は1割ほどにすぎなかった³⁴。そのような状況のなか、森近村に浄土宗寺院の随泉寺を菩提寺とする上層農家を中心として荒谷浄土講中が形成された。現在もなおそのかたちを残す浄土講中は、随泉寺をなかだちにして結びつく荒谷家一門の同族集団とほぼ重なった。浄土講中の中心的存在は、随泉寺の開基檀家である土居家であった。

この土居家から詮廓（1764—1826）という浄土宗僧侶が出ており、その江戸修学と生涯について、別稿で論じたことがある³⁵。明和元（1764）年、土居家6代源左衛門の三男として生まれた詮廓は、安永8（1779）年、15歳のとき、随泉寺の上寺の正念寺の13代住職である隆詮のもとで出家した³⁶。出家の翌年、詮廓は江戸に向かい、芝（現在の東京都港区）の増上寺に学んだ。

徳川家の菩提寺として知られる増上寺は、関東十八檀林と称される浄土宗僧侶養成教育機関のひとつであった。なかでも筆頭檀林であった増上寺には全国から多くの子弟が参集し、常時3000人が集ったという。増上寺は学問中心地のひとつを呈した。詮廓は増上寺で修学を開始するまでにある程度の基礎学習をすませていると思われる。彼はときの随泉寺住職の順応（？—1778）から指導を受けていた可能性もある。詮廓は修学先の増上寺から実家の土居家に十数通の書簡を宛てている³⁷。その書簡の初期のものをみると、森近村で手習いを受けた子弟のなかでも、おそらく彼

は優秀なひとりであったらうことがうかがえる。その詮廓の僧侶としての進路は、彼の年齢を考えると、師僧の隆詮や順応の助言もあったかもしれないが、父源左衛門の判断によるところが大きかったと思われる。篤い信仰心と富農としての経済力をもつ土居家は、彼の江戸修学を許す事情にあり、詮廓の17年余り（約205ヵ月）にわたる江戸修学が実現した³⁸。

彼の江戸修学に要した全費用を算出することはできないが、たとえば、飢饉のあった天明期、「当年ハ世間一統ニ不作之事故申遣候事も如何ニ存候得共」、「金子等も差支大難儀致被申候相成候ハ、来春早々も金子貳三両も御のほせ被遣候」という江戸からの要請に対し³⁹、詮廓の「金子過分御越被下忝受納仕候」という土居家宛ての書簡が認められるように⁴⁰、実際に土居家から「金子貳三両」以上が送金されることがあった。江戸修学にともなう経済的負担が相当程度のものであったことがうかがえる。江戸での檀林修学の継続は、現実問題として学費の送金が途絶えては成り立ちがたかったのであろう。僧侶となるための教育を得ることは、信仰心だけでなく、経済的事情が許すかどうかが決して小さな問題でなかったことがわかる。詮廓の場合は、実家が学費を負担したケースであり、他に国元の師僧や何らかの支援者がそれを負うこともあったと考えられる。土居家からの持続的な送金に支えられた詮廓は、「眼病」に苦しむ時期もあったが、おおむね順調に修学をつづけ、課程は9部に分けられるうち、第6部の文句部まで進んだ⁴¹。そして、享和3（1803）年、増上寺山内の昌泉院の13代院主に迎えられた。

増上寺山内の寺持ちの僧侶を寺家方といい、昌泉院は「寺家方三十坊」や「坊中三十坊」などと呼ばれた寺院のひとつであった。同院は「御老中牧野備前守殿宿坊」であり、他の諸侯とも関係のある寺院であった。坊中はまた諸寺院の取り次ぎや御霊屋料の差配などにも従事した。増上寺領は享保期には1万石以上に達しており、寺領の支配機構の中心は輪番所であり、坊中30ヵ院から毎年5ヵ院が輪番所に詰め、御霊屋料収納請払や村方公事訴訟などの任務にあたった⁴²。詮廓も輪番僧を勤め、「拙寺儀も当年者御輪番当職当番迄承甚々多用ニ御座候、伴御当山内へ住職仕候難有サエ者御大切之御霊屋領分之輪番当職承仰候段、身ニ余リ難有出家致し仏余光実ニ難有事ニ而御座候、輪番当職与者当年者御霊屋附御領分預リ大勢之役人江下治申付領分庄屋共百姓共支配致御年貢等取立御領分公事訴訟之裁許いたし公儀御用承り御役ニ而御座候」と記す書簡を実家に宛てている⁴³。森近村を出て江戸に向かった詮廓は、長年にわたる檀林修学を経て、僧侶として教団内の重要なポストにつく結果を結ぶにいたった⁴⁴。没年は文政9（1826）年であり、同院で没したものと思われる。

詮廓の他、森近村や土居家に関係する者のなかから、江戸に学び、僧侶としての進路について人物に、了笈（1753－1828）、光含（生没年不明）、洞誉（生没年不明）らが認められる。了笈は土居家分家の寺山家3代金十郎の弟である。光含と洞誉は彼らの書簡から土居家と関係のある人物であることがわかるが⁴⁵、出自は特定できない。三人はそれぞれ修学後、江戸で清源寺（牛込）、雲光院山内長源院（深川）、西岸寺（小石川）に住職を得て、僧侶として一定程度の成功を果たしている⁴⁶。別稿でも言及したように、彼らは詮廓に先行する世代であり、詮廓の江戸修学をサポートする役割を果たしている。詮廓の修学を成功させたいまひとつの背景に、彼らのような同郷人の存在があったことも看過できない点である。

② 詮廓につづく農民子弟の事例

興味深いのは、詮廓や了笈らにつづく次世代の子弟の動向である。森近村あるいは土居家に関係する者のなかから、確認できる範囲で、顕隆、隆恢、富八の3人が江戸修学に向かっている。詮廓や了笈らの江戸修学とそれを通じた僧侶としての成功の影響と把握される。顕隆は清源寺の了笈の弟子、隆恢と富八は昌泉院の詮廓の弟子となり、檀林修学ないしは修学準備のため、江戸に出てきていた。了笈のもとにいる顕隆は賀茂郡助実村（現在の東広島市西条町）の幸次郎という者の息子であり、詳細は不明であるが、土居家か寺山家と縁のある家であったのであろう。詮廓のもとにいる隆恢は詮廓の実兄の井野口屋平次郎の息子である⁴⁷。富八も土居家と何らかの関係のある家の子弟であったと思われるが、出自は未詳である。彼らは江戸にいる詮廓や了笈の存在をあてにして森近村を出ていること、換言すれば、詮廓や了笈をよく知る彼らの親が子を江戸に送り出していることは明らかである。詮廓や了笈は彼らの江戸での様子を報告する数通の書簡を土居家に宛てている。

たしかに、詮廓も了笈ら先世代のサポートを受けて檀林修学を進めたが、修学前から江戸にいる了笈らと連絡をとりあい、先世代が詮廓の増上寺入寺を手引きしたのではなかった。たとえば、光含の書簡をみると、彼は竹原の西方寺の弟子で江戸の相林寺（山谷）に住職していた良碩と会う機会があり、良碩が「森近村より御当地へ被参候由を御咄しニ付何連の人やと存候ニ而早速増上寺山内相尋候処、……一向相見不申能々相咄致候処、其御元御子息扱ハ惣次郎殿とも申程之事ニ御座候」と記すように⁴⁸、詮廓が江戸に来ていることを知って、むしろ驚いている。詮廓と先世代の関係は、基本的にこの段階からスタートしている。森近村から江戸での檀林修学を行った最初の人物が誰かはわ

からないが、先世代や詮廓はそれぞれ開拓的な例であったといつてよい。詮廓らも檀林修学経験をもつ随泉寺や正念寺の師僧を介して江戸に向かっている⁴⁹。その点で詮廓らに先行する師僧がおり、仲介役を果たしているわけであるが、少なくとも親類や縁者などの私的縁故を利用して増上寺に入寺するものではなかった。

それに対し、詮廓につづく次世代は、詮廓らが開拓したルートを頼って江戸に向かう点で特色的である。顕隆らは了笈や詮廓の「弟子」となっている。江戸に向かった彼らの進路は、おそらくそれぞれの父、すなわち隆恢の場合でいえば、詮廓の実兄の平次郎が判断するものであったと思われる。森近村を出た詮廓らの修学ぶりや活躍ぶりが、彼らが江戸から土居家に宛てた書簡、あるいは帰国などの機会を通じ⁵⁰、森近村にいる平次郎らに伝わる。詮廓らの前例が平次郎らのなかに成功例として認識され、その成功例に息子の将来が重ねられ、江戸に送り出された結果が、隆恢らが江戸にいるという事実なのであろう。

実は次世代らの修学経過には留意される共通点がある。別稿で論じたことがあり、詳述は避けるが、詮廓はふたりの弟子について、つぎのように評することがあった。まず隆恢について、「兎角我儘申甚以のうてんき、定而親元江金子等無心申遣候事与被察候、……拙寺異見仕候得共中々用候様之気性ニ而者無之」と述べ⁵¹、不真面目な修学態度に困っていたようである。富八についても、その名前が示すとおり、彼は出家前であったのだが、「富八事出家致不申、何分ニも読書甚々きらい、致方無御座候」と述べ⁵²、僧侶としての資質に欠けることを指摘している。了笈のもとにいた顕隆は修学中に「出寺」し、「行方相知レ不申」という騒動もあった⁵³。はからずも次世代の子弟らに共通する行状の不良は、若気のいたりという側面を認めるにしても、詮廓らをずいぶん困らせるものであった⁵⁴。このような僧侶としての資質や適性に欠ける人材の江戸への流入は、良くも悪くも森近村や関係の農家のなかで、僧侶となるための江戸修学の機会が、めざされる進路のひとつとして、より具体的現実的な選択肢となって開かれつつあったことを物語る。流行現象というには事例が限られるが、経済面などの事情が許せば、それほど壁を感じる進路でなくなりつつあったと推測される。

③ 岡垣内家の隆徳の事例

安政期、岡垣内家からも隆徳（1844－1924）という浄土宗僧侶が出た。隆徳は先述の得之助の実兄である。詮廓らめぐる一連の檀林修学動向の延長上にある事例であると把握される。父武太郎は詮廓らの前例を当然知るのであろう。長男の隆徳が僧侶の進路を歩むこととなった経緯は推察するしかないが⁵⁵、安政3（1856）年、彼は賀茂郡下市村（現在の竹原市竹原町）の西方寺11代隆永のもとで出家し、江戸の増上寺に向かうこととなる。詮廓が出家した正念寺とは出家先寺院が異なるが、隆徳も国元寺院で出家し、檀林修学をめざすものであった。江戸にいる詮廓を頼って縁故入寺した上述の隆恢らのような例とは違った。

隆徳は少なくとも19年半余り（235ヵ月）にわたる増上寺での修学を経て、明治13（1880）年から安芸国宮島の光明院の26代院主を勤めている。大正10（1921）年、隆徳は隠居し、同13年、没した。享年79歳であった。

隆徳の檀林修学にかかわる特色として、とくに以下の点に言及しておきたい⁵⁶。

第一は、彼の檀林修学に果たす出家先寺院の役割である。増上寺の『入寺帳』によると、西方寺は江戸期を通じて少なくとも19人の修学僧を送り出している。当時の賀茂郡の浄土宗寺院8ヵ寺のなかで最多の送り出し数である。隆徳の師僧の隆永も、隆徳を含む5人を増上寺に学ばせている⁵⁷。隆徳が江戸修学に向かう幕末期には、修学僧の送り出し側の国元寺院と修学僧の受け入れ側の檀林寺院（増上寺）のあいだに、ある程度組織化された修学ルートが形成されていたことをうかがわせる。たとえば、増上寺で隆徳の入る寮の寮主である真観が西方寺に書簡を宛てて、隆徳について「当人儀在寮申候付、精々教示可致候」などと記し、彼の修学の様子を報告しているのは、それを示す一例であろう⁵⁸。安永期という比較的はやい時期に檀林修学を果たした詮廓の場合、同郷の先輩格の了笈らから彼の様子を伝える書簡が土居家に宛てられることはあったが、増上寺側の僧侶から国元へ送られる書簡はみられなかった。

また、興味深いのは、国元の西方寺と江戸の増上寺を往来し、江戸での隆徳ら修学僧の様子を国元に伝達する役割を果たす僧侶が存在することである。隆徳は文久元（1861）年、一時帰国していたようであり、再び竹原から江戸に戻るとき、彼は別の西方寺修学僧と従僧と思われる僧侶の3人で移動している。その従僧は閑竜といい、人物の詳細は不明であるが、隆徳のような檀林修学を行う修学僧ではなかったようである。閑竜は西方寺と連絡をとるとともに、岡垣内家にも書簡を宛て、江戸での様子を「隆徳様之儀者少も御心配ニ不及、御案主様至而御心節に被仰弟子同様ニ被致、誠ニ小子共迄も千万仕合奉存候」と武太郎に伝えている⁵⁹。閑竜は次に江戸に赴く機会に、隆徳に実家の岡垣内家の様子伝えることがあったかもしれないし、別の修学僧についても同様に西方寺や実家に連絡をとるようなことがあったかもしれない。国元と江戸を往来し、修学僧をサポートし、修学僧に関する情報を伝達する役目を負う閑竜のような人物の存在は、やはり送り出し側の西方寺と受け入れ側の増上寺における修学ルートの整備のあったこと

を思わせる。あるいは閑庵は江戸と国元の往来のみならず、国元の関係農村などを回り、見込みのある子弟をリクルートするような役割にもたずさわっていたかもしれない⁶⁰。たしかに、出家を偶然や縁故のみに任せていたら、隆恢や富八のような例が続出しかねないから、リクルート役のような存在は重要となるであろう。国元寺院を媒介して江戸に向かう修学ルートが整えられ、そのルートを利用して檀林修学を果たしたのが隆徳の例ととらえられる。この場合、江戸の檀林寺院とつながり、かつ地元にも目配りのゆく国元寺院が、農民子弟の江戸修学の機会を開くいわば窓口として機能していることを指摘できるであろう。国元寺院が中間にあって江戸と農村を結び、その一環のなかに隆徳の江戸修学は成立しているといえる。

第二は、黒瀬地域で活発化する人々の移動との関係である。とりわけ文化・文政期以降、農民の他国稼ぎや移住が頻繁となる。依然、長男は家業を継ぎ、次三男らは若干の土地を分け与えてもらって分家するか余業に従事するかというような一般的状況があるとはいえ、村をこえて他地域へ生活手段を求める農民に対し、その機会が開かれつつあった。切田村では他国稼ぎの流行現象が起きるほどであった⁶¹。他国稼ぎは、零細農や浮過層が家計補填のために起こす行動という限定的な意味あいをこえ、むしろ貴重な金銀収入をもたらす手だてとして少なからず農民のなかで積極的選択ととらえられつつあるものであった。実際、他国稼ぎによってもちこまれる他国金銀収入は黒瀬地域の経済を潤し、地域経済の再生産に大きな役割を果たすようになっていた⁶²。また、他国に出稼ぎし、その地で成功し、居宅を構えるまでになる植原村の増平のような者もあらわれた⁶³。さまざまに労働の場を求める人々の地域間の移動は、いよいよ活発の度合いを増しつつあった。

僧侶となる進路によって開かれる将来は、たしかに、このような他国稼ぎなどによって得られる将来とは異質である。しかし、檀林修学の結果、何らかの寺院への住職を得ることは、信仰的充実のみならず、僧侶として一定程度の社会的地位や経済的財産の獲得をともなうものである以上、職業の問題が絡む。もちろん、僧侶となるために村を出る進路と出稼ぎのために村を出る進路を単純に同じように扱うことはできない。だが、両者がそのさきに一定程度の社会的経済的自立を果たしうる生活の手だての獲得の可能性をともなうという点において、村を出るというそれぞれの行為はまったく別次元のものと断じてしまってよいとも思えないところが残る。興味深いのは、出家し、江戸修学に向かおうとする隆徳は、その際、実面積で6畝余りの自身の飯米分を確保できる程度の田地ながら、30歳となったら勝手にしてもよいという約束で、父武太郎からその土地を永代譲渡されている⁶⁴。僧侶として生きようとする隆徳の進路は、いわば農民として生きる世俗的退路が確保されているわけである。父武太郎は、僧侶として生計を立てていくことと農民として生計を立てていくことを、彼が子に望むのはむしろ前者であろうが、ともに生活の手だてとして互換可能なものと整理する職業観をもつものであったのかもしれない。僧侶となるために江戸修学に向かった隆徳の例、あるいは文化・文政期に重なる詮廓につづく次世代らの例は、黒瀬地域で農民子弟がよりよい生活手段を求めて村を出る動向の活発化とまったく無関係に生起していたのでなく、何らか連動するなかにみられた動きとしてとらえてみることもできようが、詳しくは別の機会に論じたい。

おわりに

教育に関する営みは、政治、経済、文化、宗教、娯楽などのさまざまな要素と関連しあうなかに成立している。とりわけ近世にそれは顕著である。本稿では、このような問題意識を前提に、とくに宗教との接点のなかに教育をとらえる関心から、瀬戸内農村の一事例として賀茂郡黒瀬組をとりあげ、農民子弟の学習活動のうちに観察される寺院や僧侶のかかわりの様相の一端をみてきた。もっとも、本稿は寺院や僧侶に関する教育史的研究を進めるうえでの準備的考察の位置にあり、以上ではそのような様相を一瞥しえたにすぎない。

ここまで検討してきたような、農民子弟と僧侶がかかわるなかに生成される教育に関する営みのさまざまなあり方は、また社会的経済的要素とも関連するはずである。本稿では、近世後期における農家の自立意識と家格意識の問題、労働力の移動の問題についての若干の言及を行ったが、じゅうぶんな考察はできていない。今後の課題である。

また、いうまでもなく、寺院や僧侶の人々とのかかわりは、手習いや学問の教授・学習を介したより学習的意図が明確な営みの範囲にとどまるものではない。信仰や儀礼の施設として寺院が果たす役割はもちろん、寺院はしばしば芸能興行の場となり、人々に娯楽を提供する役割を担ったし、僧侶は人々とともに俳諧や詩画を楽しむことを通じて交流することがあった⁶⁵。このような娯楽や趣味を通じて人々の生活の充実や地域の文化振興に果たす寺院や僧侶のありようについては、本稿でほとんど言及できなかった。稿を改めて論じたい課題と思っている。

〈註〉

- ¹ 本稿は東広島市黒瀬町史編さん事業の成果の一部である。本稿で引用する主な資料は同編さん委員会から提供を受けた。なお、黒瀬組18カ村の範囲は、現在の東広島市黒瀬町を中心に、同市西条町の一部と呉市の一部に及ぶものである。
- ² 辻本雅史・沖田行司編『教育社会史』山川出版社、2002年、pp.156-160, p.170, 参照。
- ³ 川崎喜久男『筆子塚研究』多賀出版、1992年、久木幸男「教育史学用語を考える—筆塚と『筆子塚』—」『日本教育史往来』102, 日本教育史研究会、1996年、木村政伸「『筆子塚』か『師匠塚』か」『日本教育史往来』103, 日本教育史研究会、1996年、など参照。
- ⁴ 明治21（1888）年の内務省調査時の同寺の報告は檀家数23戸、信徒数130人である。
- ⁵ なお、墓碑は風化が著しく、裏面の24人の名前は、判読できる範囲で挙げれば、以下のとおりである。弥太郎、作次良、庫次良、次太良、幸助、松野、□（文カ）助、両蔵、熊吉、忠平、恒平、亀次良、泰助、□（柳カ）助、増□（広カ）、なみ上、平助、嘉十良、浅助、久平、兼助、佐蔵、作次良、岩吉。「松野」と「なみ上」と読めるふたりは女性であろうか。台石に刻まれた名前は、拓本による判読を試みたが困難であり、再調査を予定している。
- ⁶ 明治18（1885）年における荒谷得之助（1853-1922）による謄写である（森近・岡垣内荒谷家文書）。得之助は礼助の孫にあたる。岡垣内家の来歴は不明なところもあるが、現在のところ、後述の土居家と先祖を同じくするものと考えられる。
- ⁷ のち、仙助の息子の武太郎（1821-1884）のとき、慶応4（1868）年、「庄屋格」に復帰する。しかし、それはあくまでも「庄屋格」への復帰であり、ついに「庄屋」としての再興はなかった。所持地も次第に減らしたようであり、文政10（1827）年の調べで四反六畝あまりを有するにすぎなかった。近世中後期の賀茂郡において、農村への商品経済の流入にともなう新興農家の台頭があり、岡垣内家のような旧家層が没落する例は少なくなかった。
- ⁸ 国立歴史民俗博物館による「非文献資料の基礎的研究（筆子塚）」報告書によると、たとえば、群馬県の「筆子塚」の悉皆調査の結果、623基のうち、もっとも多い身分は農民で223基（35.8%）、ついで僧侶197基（31.6%）、以下、医者29基（4.7%）、武士27基（4.3%）、神官17基（2.7%）などである。国立歴史民俗博物館編『筆子塚資料集成—千葉県・群馬県・神奈川県—』国立歴史民俗博物館編、2001年、参照。
- ⁹ 文部省編『日本教育史資料九』（1892）の「私塾寺子屋表」に仙助の例は挙げられていない。後述の単流を含む森近村の他の例も挙げられていない。なお、『西条町誌』（西条町誌編纂室、1971年）には、幕末維新期の森近村で「読・書・算」を教えた手習師匠として「荒谷石太郎」と「中原某」が記されている（p.509）。ともに門人数などの詳細は不明である。このうち、荒谷石太郎については、その事績を伝える「頌徳碑」が町内に残り、「荒谷石太郎万学之士也」、「王政維新之初政府令全国奨子弟教育」、「執教鞭在職三十年勤精不息遍于一郷頃者受業者相謀欲建碑以彰其徳来」とある。石太郎は手習師匠が近代学校の教師となった例といえる。師を慕う教え子が石碑の建立をもってその徳を敬うという、近世に特色的にみられた行為とそれを成り立たせる師弟関係が、近代のある時期までは残る様相をうかがわせ、興味深い。ちなみに、荒谷石太郎は屋号を寺山といい、土居家の分家（天和3〈1683〉年に分家）である。中原は土居家の分家格（享和2〈1802〉年に契約）である。
- ¹⁰ 『過去帳』は以下のような観誉の略歴も伝えている。「芳蓮社観誉上人察阿智道単流大和尚当山八世、出生者御調郡植野村山田孫右衛門次男、同郡三原大善寺十八主横誉上人之直弟也、檀林附法ハ江戸増上寺六十三世梵誉大僧正御代五重宗脈共貴師也、勅許上人位者安政三辰年七月十四日参内ス、総本山万誉上人顕道大僧正御代也、当山住職者安政二卯年十月廿八日達御聞御免許二相成候」。なお、その出自については、他の資料と整合しない部分もあり、継続調査中である。
- ¹¹ 別の地域の事例であるが、たとえば、尾張国中島郡二俣村（現在の稲沢市祖父江町）の通順寺（浄土真宗大谷派）の本堂に手習子が落書きしたと伝えられる墨書が残る。
- ¹² 前掲、註2、辻本・沖田書、pp.159, 参照。
- ¹³ 父武太郎のあとを継いで岡垣内家の当主となった得之助は次男である。
- ¹⁴ 安政2（1855）年「賀茂郡国近森近村浄土宗随泉寺無住ニ付後住願書附」（森近・岡垣内荒谷家文書）。
- ¹⁵ 単流がかつて江戸の増上寺で修学を行ったことがあるように、村の僧侶は学問や文化の中心地である江戸や京都などにある本山学校での修学経験をもつ者が多い。彼らは村に留まる数少ない「外部」としての都市文化とつながる知識人であり、文化人であり、教師であった。この点からも村の寺院に住する僧侶のあり方は興味深い。前掲、註2、辻本・沖田書、pp.156-160, 参照。

- ¹⁶ 別の僧侶の顕彰墓碑の例であるが、師僧を敬う弟子僧侶らが建立するものがある。たとえば、単流のあと、明治12(1879)年から随泉寺の住職を勤める大成靈玄は、明治25(1892)年、師僧である豊田郡中野村の西光寺の「本蓮社教誉」の「紀年之碑」の建立を、自身を含む弟子僧侶4人(靈玄、寛鳳、靈学、満定)ではかっている。単流の墓碑も弟子僧侶が関与するものであった可能性もある。この場合、「門弟」の意味は、近隣の農民子弟らに限定して考えることは事情にあわなくなる。「門弟」の意味するところが、僧侶のみ、あるいは僧侶を含む子弟らであれば、単流の教授内容も、後述するように、「いろは」をこえて、学問色のあるものであったとも推測しうるかもしれない。単流の「筆子塚」に関する他の資料はなく、詳細は不明である。
- ¹⁷ ちなみに、得之助は、その「履歴書」によると、隆的に「普通学」を学んだあと、民間学者と思われる人物からそれぞれ「歴史経書」(慶応元年~同3年)、「佐伝唐詩選算術」(明治元年~同2年)、「漢学歴史地理」(明治2年~同4年)を学び、明治5(1872)年から翌年にかけては「賀茂郡竹原町隆真和尚ニ就キ経書仏学修行」を行っている。隆真は西方寺(浄土宗鎮西派)の僧侶と思われる。彼の「履歴書」に記される「学業」は、隆真に就いての学習が最終課程である。
- ¹⁸ 佐藤尚子・大林正昭編『日中比較教育史』春風社、2002年、p.167、参照。
- ¹⁹ 長男は家業を継ぎ、次三男らは若干の土地を分け与えてもらって分家するか余業に従事するかというような一般的状況があるとはいえ、とりわけ化政期以降、黒瀬組で「他国稼」による労働力の移動が活発化することが指摘されており、留意される。阿部英樹「近世瀬戸内における農村経済の特質」『広島大学農業水産経済研究』9、1999年、参照。
- ²⁰ 安政5(1858)年「系書並墓所玉垣之由来控帖」(森近・土居荒谷家文書)。
- ²¹ もっとも、師の徳を強調しすぎるのは一面的にすぎるのであろう。木村政伸『近世地域教育史の研究』(思文閣出版、2006)は、筑後国浮羽地域の事例研究を通じ、村役人層による手習所の経営が民政安定や村落共同体の秩序維持の作用をもち、とくにこの地域で「幕末期に急増した村役人の手による寺子屋は、農村再建を背景とした諸活動の一つとして、経済合理性とともに勤儉節約などの実践的な通俗道徳を内面化した人間形成を、大衆的に行うことをめざしたものであった」(p.198)と述べており、留意される指摘である。
- ²² 文部省編『日本教育史資料九』(富山房、1892年)の「私塾寺子屋表」に掲載される(p.161)。黒瀬組18カ村では同資料に掲載される唯一の「寺子屋」の例である。
- ²³ 文政12(1829)年「賀茂郡黒瀬組村々諸品帖」(国近・岡田家文書)。なお、同村の三島神社に安永期から文政期にかけて作成された俳諧額4枚が奉納されており、黒瀬組の農家のなかで俳諧の流行があったことが知られる。
- ²⁴ 写真は『黒瀬町勢要覧』(黒瀬町、1998年、p.12)から転載。現在、墓碑は風化が著しく、判読の困難な箇所も少なくない。碑文の判読は黒瀬町郷土史研究会による調査の成果に助けられるところが大きい。撰文は宇都宮黙霖(1824-1897)によるものである。黙霖は現在の呉市出身の僧侶(浄土真宗本願寺派)であり、勤王僧として知られ、吉田松陰らとも交流があった。後述の楢原村の西福寺の峻嶺が父である。
- ²⁵ 黒瀬組18カ村のひとつの楢原村に所在した西福寺(浄土真宗本願寺派)の『過去帳』に「善友」として彼の記録があり、「四月廿九日菅田邑中嶋源太郎父梅庵事六十九才也」と記されている(楢原・西福寺文書)。また、「慶雲寺弟子同寺預二付葬ル」ともあり、梅菴は南方村の慶雲寺(浄土真宗本願寺派)に師僧を求めていたようでもある。詳細は不明である。
- ²⁶ 私塾の開設数は全国で数千に達したといわれる。極端にいえば、学者の数だけ私塾もあったといえる。多くは師匠の居宅を利用した小規模のものであったと思われる。私塾の形態や規模はさまざまであり、学問所と手習所の区別は明確でない。手習所よりも程度の高い課程や専門学を提供するものを私塾(学問所)と呼ぶ。
- ²⁷ たとえば、後述の完山塾(寺家村)や廉塾(備後国神辺)、咸宜園(豊後国日田)の門人のなかに彼の名前はみえない。碑文から知られない別名で門人になっている場合、それは判断できない。
- ²⁸ なお、丸山村の庄屋・西亀恕七が招いた学僧・桂林悟澄(1800-1873、真宗本願寺派)は栖霞楼塾を開いた。丸山村も黒瀬組18カ村のひとつである。招かれた慶応元(1865)年から没するまでの約8年間、丸山村に住し、子弟教育にあたった。町内に墓碑が残る。
- ²⁹ 大戸安弘『日本中世教育史の研究—遊歴傾向の展開—』梓出版社、1998年、参照。
- ³⁰ 完山は文化4(1807)年から天保11(1840)年にわたる「鶴亭日記」(46巻)を伝えており、地域教育史研究の貴重な資料となる。また、完山の墓碑が東広島市西条町内に残る。嘉永6(1853)年、完山の13年忌に門人百余人によって建てられたものである。撰文は門人であった江木鱈水になる。西条町誌編纂室編『西条町誌』西条町、1971年、pp.590-593、参照。

- ³¹ 東広島郷土史研究会が調査した「野坂完山門人記録」(1985年)を参照。
- ³² 文化8(1811)年から文政7(1824)までのあいだに330余人の入門者が認められるが、黒瀬地域出身と判断できる者は含まれない。『広島県史』(近世資料編VI, 広島県, 1979年), 富士川英郎『菅茶山』(福武書店, 1990年), 参照。
- ³³ 日田郡教育会編「入門簿」『淡窓全集』下(増補), 思文閣出版, 1971年, 参照。
- ³⁴ 有本正雄「明治前期郡区別宗派別寺院統計」『内海文化研究紀要』21, 広島大学文学部内海文化研究施設, 1992年, pp.92-93, 参照。
- ³⁵ 拙稿「浄土宗関東檀林の修学僧に関する考察」『日本の教育史学』42, 教育史学会, 1999年。
- ³⁶ 安永8(1779)年「賀茂郡森近組百姓源左衛門倅惣次郎剃髮仕度願書付」(森近・土居荒谷家文書)。詮廓は幼名を惣次郎といった。
- ³⁷ 以下に引用する詮廓に関する修学僧書簡は、森近・土居家文書の一部である。
- ³⁸ 増上寺の『入寺帳』に記される詮廓の記録によると、寛政4(1792)年から同10(1798)年までの約6年間は、増上寺から小石川の伝通院に移って修学を進めている。伝通院も檀林寺院のひとつである。
- ³⁹ 天明2(1782)年12月5日付, 土居善左衛門宛, 了笈書簡。了笈については後述する。
- ⁴⁰ 天明3(1783)年3月3日付, 土居善治郎宛, 詮廓書簡。前年3月にも「金貳両」を土居家は送金していたようである。
- ⁴¹ 檀林で学ぶ課程を「九部宗学」や「九部浅深」と呼び、名目部, 頌義部, 選択部, 小玄義部, 大玄義部, 文句部, 論部, 無部と進む(部転)。一般に1部をおえるのに3年を要する。
- ⁴² 長谷川伸三『近世農村構造の史的分析』柏書房, 1981年, p.64, 参照。
- ⁴³ 9月4日付(年不明), 土居善左衛門宛, 詮廓書簡。
- ⁴⁴ 父源左衛門が学費負担をどのような教育投資として考えていたかは興味深い問題であるが、その動機や意識が明確に語られる資料はみない。ここでは、意識の問題とは別に、事実の問題として、詮廓の森近村を出て僧侶としての教育を受ける進路は、昌泉院への住職というひとつの顕著な成果を結んだといえることを確認しておく。
- ⁴⁵ 安永9(1780)年6月13日付, 土居善左衛門宛, 光含書簡。天明元(1781)年1月21日付, 土居善左衛門宛, 洞誉書簡。
- ⁴⁶ 彼らがいずれも江戸の寺院に住職を得て、森近村の随泉寺に戻っていないことも興味深い。長期にわたる檀林修学を果たした彼らにとって、随泉寺レベルの寺院への住職は、それほど魅力的な進路でなかったのであろうか。
- ⁴⁷ 平次郎は土居源左衛門の次男であり、天明3(1783)年に井野口屋として分家した。
- ⁴⁸ 安永9(1780)年6月13日付, 土居善左衛門宛, 光含書簡。
- ⁴⁹ たとえば、詮廓の師僧である正念寺の隆詮は、かつて増上寺で修学を行っている。正念寺14代隆演が記した「当寺由来并宝物書上ノ別書控」による。
- ⁵⁰ 帰国は少なくとも詮廓1回, 了笈2回, そのうち1回はふたり一緒の帰国が確認される。
- ⁵¹ 6月20日付(年不明), 土居源左衛門宛, 詮廓書簡。
- ⁵² 6月20日付(年不明), 土居源左衛門宛, 詮廓書簡。
- ⁵³ 5月23日付(年不明), 土居源左衛門宛, 詮廓書簡。
- ⁵⁴ 詳細は不明であるが、修学後、顕隆は大願寺(不明), 隆恢は西蓮院(大坂)に住職を得た。
- ⁵⁵ 武太郎は少なくとも六男四女の子に恵まれたが、長男隆徳だけが先妻の子であり、武太郎の跡を継ぐ次男得之助以下、皆は後妻の子であった。隆徳の母は嘉永4(1851)年に亡くなっており、彼が八歳のときである。隆徳が長男でありながら岡垣内家を継がず、別の進路を歩むこととなった背景に、母の早世という事情が少なからず影響していたと思われる。
- ⁵⁶ 詳しくは別の機会に論じたことがある。拙稿「近世後期農民子弟による浄土宗関東檀林修学の特色」『日本宗教文化史研究』4-2, 2000年, 参照。
- ⁵⁷ 増上寺山門まで隆徳を迎えに出る兄弟子の隆春や隆哲の姿も認められる。隆春はのちに西方寺13代住職となる。
- ⁵⁸ 文久元(1861)年4月12日付, 西方寺隆永宛, 真観書簡。隆徳は修学6年目のころ。以下に引用する隆徳に関する修学僧書簡は、森近・岡垣内荒谷家文書の一部である。
- ⁵⁹ 文久元(1861)年4月7日付, 岡垣内武太郎宛, 閑竜書簡。
- ⁶⁰ いうまでもなく、浄土宗教団は僧侶の妻帯習慣をもたず、相続は世襲原理によらない。基本的に僧侶は自身の子弟(実子)をもつことがないから、新たな僧侶人材は在家子弟のなかに求められる。本考察で扱った森近村出身の

僧侶は、みな農家出身である。

- ⁶¹ 山本那津子「近世後期の瀬戸内農村における人口動向と他国稼（上・下）」『芸備地方史研究』216-218, 1999年, 参照。
- ⁶² 阿部英樹「近世瀬戸内における農村経済の特質」『広島大学農業水産経済研究』9, 1999年, 参照。
- ⁶³ 嘉永6（1853）年, 増平は備中国上房郡岩村に出稼ぎし, 移住した。阿部英樹『近世農村地域社会史の研究』勁草書房, 2004年, pp.151-157, 参照。
- ⁶⁴ 安政3（1856）年「永代譲渡シ手形証文」（森近・岡垣内荒谷家文書）。
- ⁶⁵ 竹下喜久男『近世地方芸能興行の研究』清文堂出版, 1997年, 森越博『応饗雑記と仏教』桂書房, 1998年, 参照。

【付記】

本稿は平成17-19年度科学研究費補助金・基盤研究B（課題番号：17330164「知の伝達メディアの歴史研究」代表：辻本雅史）および平成18-20年度科学研究費補助金・若手研究B（課題番号：18730502「近世人間形成に果たす宗教メディアの意義」）の研究成果の一部である。

A Study on Participations of Buddhist Priests in Educational Works for Young People in Farming Villages in the Edo Period : a Case of Kurose District in Aki Province

Kazuaki KAJI

This paper is to clarify participations of Buddhist priests in educational works for young people in farming villages in the Edo Period. In this investigation, three tombstones of masters of private elementary schools of the Edo period placed by their students were found. Two of the tombstones are Buddhist priests' one. The tombstones called "Fudekozuka" or "Shishozuka" show the historical fact that Buddhist priests taught young people how to read and write.

Some farmer's children wished chances to learn even harder and went to Edo or Kyoto to study through the introduction of Buddhist priests. Buddhist priests living at temples in farming villages, who had once pursued their studies at the head temple schools, such as Zojoji Temple, Denzuin Temple, in Edo or Kyoto when they were young, played roles as regional teachers and intellectuals.